

Brief Communications

パーキンソン病患者の環境調整による転倒予防を行って

伊賀由希菜*

国立病院機構鳥取医療センター看護部 1 病棟

A case of fall prevention through environmental coordination
for a patient with Parkinson's Disease

Yukina Iga*

The 1st Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

*Correspondence: 鳥取市三津 876 番地 1 病棟

要旨

80 代男性の A 氏はパーキンソン病を有し、Hoehn & Yahr の重症度分類は III 度で、加齢に伴う認知機能低下、及び動作緩慢やすくみ足による activities of daily living (ADL) の低下がある。その改善を目指したリハビリテーション目的のために入院となった。身の回りのことは自分でほぼできていたが、入院前は週 1 回の頻度で転倒していた。入院して、ナースコールで知らせずに動いてしまうため、ベッドの足元に床センサーマットを設置したところ、それによる行動制限が原因で、トイレの時以外は臥床して過ごすことが多くなってしまった。そこで、行動制限せずに、転倒なく室内を安全に移動できる方法を、主治医、病棟スタッフ、リハビリスタッフで検討した。再度 ADL を評価し、室内環境を調整した。チェスト、テーブルなどの配置を工夫したことで、それらを手すり代わりにして室内を安定して移動できるようになった。その対策の中で、重くて安定感があり、手すり代わりにもなる椅子を設置したところ、日中は離床して椅子に座って過ごすようになった。環境調整することで、入院中は転倒なく過ごすことができ、歩行障害に起因する ADL 低下も解消された。鳥取臨床科学 10(4), 191-193, 2018

Abstract

Patient A, who is a male in his 80s, is suffering from Parkinson's disease and is categorized as Stage 3 on the Hoehn and Yahr scale. A reduced cognitive function, bradykinesia and reduced activities of daily living (ADL) due to the freezing of gait were observed in the patient. He was admitted for the purpose of undergoing rehabilitation to improve these conditions. While he was mostly able to look after himself, he had fallen down once a week prior to hospitalization. Following admission, the patient moved and walked around without calling a nurse, and a sensor mat was placed on the floor beside his bed. Restrictions on activities due to this intervention caused him to remain bedridden almost all day except for when he went to the bathroom. Therefore, the patient's doctor, ward nursing staff, and rehabilitation staff looked into methods which would remove restrictions on activities and allow him to safely move within his room without falling down. The patient ADL

was reassessed, and the room environment was adjusted. The re-arrangement of the chest and the table allowed him to move within the room in a stable manner by holding onto the furniture. As part of the environmental coordination, we also added a heavy, stable chair that the patient could hold onto, and he started getting out of the bed and staying in the chair during the day. The environmental adjustment allowed the patient to stay in the hospital without falling down and improved the reduced ADL caused by gait disturbance. Tottori J. Clin. Res. 10(4), 191-193, 2018

Key words: パーキンソン病, リハビリテーション, 歩行障害, 転倒予防, 環境調整; Parkinson's disease, rehabilitation, gait disturbance, fall prevention, environmental coordination

A 氏は 80 歳代の男性で, パーキンソン病に罹患している. 重症度は Hoehn & Yahr の分類の III 度で, 年齢に伴う認知機能低下, 及び動作緩慢やすくみ足による ADL の低下あり, リハビリテーションの目的のため個室に入院となった.

7 年前からすくみ足が現れ, 脳 magnetic resonance imaging (MRI) 検査, ^{123}I -3(meta)iodobenzylguanidine (MIBG) などの検査を受け, パーキンソン病と診断された. 某開業医の外来で通院加療を受け, L-dopa 製剤, droxidopa, ropinirole hydrochloride, selegiline hydrochloride, istradefylline などが試されたが, あまり効果なく, リハビリテーション希望で当院を受診した. mini-mental state examination (MMSE) は 27/30 点, 改訂長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) は 28/30 点, frontal assessment battery (FAB) は 9/18 点であった.

身の周りのことはなんとか自立していたが, 自宅では週に 1 回程度の頻度で転倒しており, 入院時の転倒リスク評価 (表) は A 判定であった. そのため, 移動時はナースコールで知らせるように何度も指導したが, 自分でやりたいという気持ちが強く, ふらつきながらも洗面台に行ったり, 衣類を取りにチェストまで行くななどの行動があった. ナースコールをせずに動いてしまうために, ベットの足元に床センサーマットを設置することになった. センサーマットによる行動制限が原因で, A 氏はトイレ時を除き, 臥床して過ごすことが多くなった. また,

「センサーマットを取って欲しい」や, 「なくても大丈夫」という発言があった.

今回はリハビリ目的の入院であったため, 本人の「拘束されたくない」という気持ちを考え, どうしたら拘束せずに転倒なく室内を安全に移動できるか, 主治医, チームスタッフ, リハビリスタッフと相談し, 再度 ADL を評価し, 室内環境を調整した. 家具を手すり代わりにして室内を移動できるように, チェスト, テーブルなどの配置を工夫した. 動きがスムーズになるように, 本人の歩幅に合わせ, カラーテープを床に貼って, 一定間隔の平行な線を作り, 視覚的キューを取り入れた¹⁾. また, A 氏より「椅子に座りたい」という発言があったことから, 重くて安定感があり, 手すり代わりにもなる椅子を設置した. すると, 日中は離床して椅子に座り, 本や新聞を読んだり, テレビを見て過ごすようになった. パーキンソン病患者のための椅子の工夫・開発は重要と思われる²⁾.

入院時に設置した床センサーマットは撤去し, A 氏からは「センサーを撤去してくれて良かった」と発言があり, 笑顔もみられた. 環境調整をすることで, 4 週間の入院生活を転倒することなく過ごすことができた.

千田³⁾が, 「外的因子に対しては原因ごとに対策を立てる, たとえば, 移動する床面を広く取る, 床の滑りやすさや凹凸を解消する, 転倒しやすい場所に手すりを設置する, 日常生活用品の配置を見直すなどである. また, 複数同時作業の回避, すくみ足にキューの利用, 方向転